

歴史における物語的説明と記述の関係を考え直す

苗村弘太郎 (Namura Kotaro)

京都大学文学研究科

歴史における物語的説明のモデルが Arthur Danto によって提唱されてから久しい。物語の概念はその後様々な文脈に波及していったものの、歴史における説明に関する論争はほどなくして沈静化しており、歴史における物語的説明のモデルそれ自体が持つ意義はあまり検討されて来なかったと言ってよい。しかしながら、近年、歴史における説明の問題が見直されつつあり、その中で物語的説明のモデルが再び注目を集めている。中でも本発表は、歴史家 Mark Hewitson による議論に注目する。物語的説明に関する哲学的議論に依拠しながら、近年の社会史研究が因果関係に関する考察を欠いていることが問題であると彼は主張している。この主張の検討を通じて、彼が依拠する物語的説明に関する論点に問題があることを指摘し、彼が見落としている物語の機能を考察することが本発表の目的である。

Hewitson によると、とりわけ 1980 年代以降、社会史研究の関心は文化人類学等の影響により因果関係の解明から過去の文化の理解に移っていった。その結果、多くの社会史家は因果関係に関する問題に注意を払わなくなっているという。このような研究態度には問題があると彼は主張する。彼によれば、因果関係に関する問題設定を抜きして、過去の事象に関する記述の重要性を正当化することは不可能である。したがって、因果関係に関心を持たない歴史家は自らの記述の重要性を正当化できないという非常に問題のある状況に陥っていることになる。

記述の重要性の正当化には因果関係に関する問題設定が必要だという主張のため、彼が依拠している論点が二つある。第一に、記述の重要性は物語の中においてのみ正当化されると彼は論じる。過去の事象の記述は取捨選択を伴う。物語が出来事を取捨選択を伴うというだけでなく、出来事の記述それ自体も情報の取捨選択を伴っている。この取捨選択の規準を与えるのは物語だという主張に彼は与する。したがって、歴史に関するあらゆる記述は物語のうちで回顧的に行われており、端的な出来事存在は示しえないということになる。第二に、物語は因果的説明であると彼は論じる。というのも、もしそうでなければ、無関係な出来事が理解しがたい形で並ぶことになるからである。

しかしながら、二つの論点は妥当ではない。とりわけ第二の論点は、物語が過去の事象を一定の観念の下にまとめ上げ (colligate)、過去の事象の理解をもたらすという側面が見落とされている。物語のこの機能を考察することによって、Hewitson の主張は強すぎる要

求となっていると主張する。